

「英語R」：立教大学の新たな挑戦

異文化コミュニケーション学部教授 鳥飼 慎一郎

全カリ英語プログラムはいわゆる再履修者用クラスを廃止し、英語の必修単位を落とした学生に対しては、単位認定試験とその試験を受験するに至るまでの事前準備学習をもって英語の再履修者に対応してきた。この制度はそれなりに機能し、多くの学生がこの制度によって英語の単位を取得してきた。しかしながら、近年になり学生の英語力と学習スタイルの多様化が進み、英語の必修科目の単位を落とした学生が、必ずしも自学自習を中心とする英語の学習によって期待通りに英語力を伸ばし、無事に英語単位認定試験に合格するとは限らない状況になってきた。中には、複数回単位認定試験を受験しても合格できないケースが若干ではあるが出てきている。英語の学習は一旦学習を止めると、学力が低下し始め、自力で英語力を伸ばすことが困難になる。ごく一部ではあるが、どうやって英語を勉強してよいのか分からず、時間だけが過ぎてゆき、ますます英語力が下がってしまう学生もいる。また、自分で勉強して単位認定試験を受けるよりも、クラスに出席して単位を落とした他の学生と一緒に教員の指導の下で英語を学ぶ方が自分には向いている考える学生もいるようである。

このように多様化する学生の英語力と学習スタイルに対応するために、全カリ英語研究室では、2016年度より「英語R」という新たな再履修者用クラスを開始し、再履修学生の学力と学習スタイルの多様化によりきめ細かく対応することにした。「英語R」のRは、remedialのRでもあり、repeatのRでもあり、そして「再び」という接頭語のre-のRを強く意識したRでもある。

英語Rを開講するに当たっては、いくつかの工夫をした。

○開講時限の工夫

その第1は開講時限の工夫である。立教大学の全カリ英語は、1997年の発足以来、単位取得のために80%以上の授業への出席を求めている。より多くの授業に出席して英語に接し、教員や学生と英語で様々なコミュニケーションをすることが英語力伸長の基であると考えているからである。おそらく日本で最も厳しい基準であろうこの80%以上の出席率を今後とも堅持し続けることは決して揺らぐことのない全カリ英語の根本的な方針であるが、長年の経験から英語の単位を落とす学生の多くはこの基準に達せずに単位を落とすことも分かっている。そのため、英語Rは欠席や遅刻の比較的少ない2限、3限、4限に開講した。春学期と秋学期に英語R内でアンケート調査を実施したが、英語Rを履修している学生のおよそ9割は出席不足で単位を落としていることが判明し

ており、我々の経験則の正しいことを裏付ける形となった。

○適正な教員配置

次に工夫したのは、教員の配置である。日本人学生の気持ちを理解し、より細かな指導が日本語のできるようベテランの日本人の教育講師4名を配置した。この4名の教育講師は英語R設置の趣旨を十分に理解してくれ、その実施と運営に極めて熱心であった。英語Rの担当が分かった2016年1月の段階から月に1回の割合で会合を重ね、どのような授業運営をすべきか、教授方法は何かよいか、どのような教材を使えばよいかなどについて、熱のこもった議論を重ねていった。授業が始まった4月以降も、ほぼ毎月のように集まっては、授業運営、問題点、改善点、新たな試みやその成果などの情報を共有し合い、よりよい英語Rの授業作りを目指していった。

○アクティブラーニング

3番目の工夫は、教授法にアクティブラーニングを取り入れた点である。アクティブラーニングとは、学習者自らが主体となり、自ら進んで学ぶ学習法であり、2020年から実施される新学習指導要領の大きな柱の1つである。学生は教員が前で授業をすると眠くなるらしく、居眠りが多い。しかし、アクティブラーニングを取り入れ、自分たちが主体となり助け合いながら学習してゆく方法に切り替えると、どういうわけか居眠りをする学生がいないのである。私のクラスでは、クラスを4つから5つのグループに分け、それぞれの担当部署を決めて、自分たちで辞書を引いたり教え合いながら、その部分を読み進め、その共同学習成果を基にクラスの前で授業をするという方法も何度か取り入れてみた。その方法だと学生は真剣に英語の学習に打ち込み、他グループの学生たちに自分たちの担当箇所を熱心に講義してくれるのである。一方的に教えられるのではなく、自ら率先して学び、人に教えることでより多くを学ぶ、というアクティブラーニングの理論を地で行くような学習態度と成果である。

○ゲストスピーカー制度の活用

全カリでは、各学期に1回、学外からゲストスピーカーを招聘できる制度がある。広く学外に人材を求め、授業を活性化するのが目的である。英語の学習は面白い、英語の学習以外にも役に立つことがあることを是非知ってもらおうと英語Rではこの制度を十分に活用した。筆者は、2016年度からリニューアルしたNHK高校講座「ベーシック英語」の監修を務めており、番組作成と収録のために定期的に渋谷のNHKのスタジオで番組に出演する役者やスタッフと仕事をしてきた。春学期には、その番組の出演者の一人であるフィリップ役のフィリップ・コッツフォード氏を、英語Rの授業にゲストスピーカーとして招聘し、英語の勉強方法について話をしてもらった。コッツフォード氏は教育学で学士号を得た方で、来日以来企業人向けの英語教育にも携わってきている方でもある。当日はユーモアも交え、英語の学び方について1時間以上にわたり英語で熱

弁を振るってくださった。その後の質疑応答で、学生たちは次々と手を挙げ英語で堂々と質問しはじめたのである。その姿を見て、担当教員の私も驚きを隠せなかった。やればできるのである。教員がそのような環境を作れば、学生はやるのである。



秋学期は、ベーシック英語で主演を務めている渡辺直美氏にゲストスピーカーをお願いした。渡辺氏は今人気絶頂のお笑い芸人であり、初のワールドツアーも成功させている方である。彼女は極めて多忙なスケジュールを調整して、英語Rのクラスに来てくれた。実は彼女は見かけによらず、大変な苦労人である。母子家庭に育ち、子供の頃は食べる物にも事欠き、高校入試に失敗し、大きな挫折を味わった人である。その後お笑い芸人になることを志し、吉本の養成所に入るための資金を自力で貯め、お笑い芸人になっている。それでも満足せずに、一念発起し、全ての職を辞めて単身ニューヨークに英語の習得のために留学をしている。本人曰く、最初の1週間は何を言われているのか全く分からなかったという。マンツーマンの教授法で何とか英語が分かるようになって帰国し、2016年にはニューヨーク、ロスアンゼルス、台北と回るワールドツアーを成功させている。このワールドツアーの様子は、NHKの番組でも紹介されているのでご覧になった方もおられるであろう。

渡辺氏の話は子供時代の学校での苦労話から始まり、吉本の養成所での話、芸能界の話、ニューヨークに語学留学をしたときの話、ワールドツアーを思い立ったときの話、自分の生い立ちなど、多方面にわたったが、どの話も自分の言葉で、自分の体験なり考えたことを率直かつ明るく語ってくれ、聞く者を大いに引きつけた。渡辺氏の母は台湾人であり、自分の最初の母語は台湾語なのだそうである。その上に日本語が乗る形になっており、今でこそ日本語に不自由はしないものの、以前は苦労したこともあったという。ニューヨークに行く前にカウンセリングを受けたところ、IQが通常の人よりも低く、このIQでお笑い芸人を続けるのは厳しいと言われたこと、それならばなおさらやってやろうとお笑い芸人になる意を一層強くしたことなど、極めてリアルで、その人となりがよく分かる力強い内容であった。



私が渡辺氏をゲストスピーカーとして招聘した理由は、いろいろと人には苦勞やハンディがあるが、それにめげることなく頑張るって欲しいというメッセージを伝えるためであり、英語の勉強においても単位を落としたりくらいでがっかりせずに、どんどんと前に向かって進んで欲しいという思いがあったからである。渡辺氏の話は、私のそのような期待を大幅に上回るものであり、クラスの学生全員が瞬きもせず聞き入っていた様子は感動的でもあった。渡辺氏の授業には、ベーシック英語のチーフプロデューサーや番組作成の担当ディレクターも参加してくださり、番組作成の現場からの生の話を聞くこともできた。

英語Rを教える側への効果

英語Rによる新たな全カリ英語の試みは、それを教える教員の側にも大いに刺激をもたらし、素晴らしい成果が上がりつつある。1年間の英語Rの授業で学んできたことやアクティブラーニングの成果をまとめ、英語R用の教科書を自分たちで作ろうという気運が起こったのである。その声に、ある大手の教科書出版社も賛同してくれ、2017年の秋に英語Rの成果を存分に盛り込んだ教科書が出版できることになった。英語Rの担当教員たちの熱意は凄まじく、秋学期からは毎月会合を開き、この1月以降は毎週のように集まっては編集会議を開催し、取り上げるトピック、原文の書き直し方法、教科書の構成、提示方法、グラフィックオーガナイザーの活用方法、アクティブラーニングの成果を取り入れた様々なアクティビティーなどのアイデアを出し合っている。私は聞き役に回ることが多いのだが、おかげでかなりアクティブラーニングについて耳学問ではあるが学ぶことができ、感謝している次第である。

これからの再履修者用クラス

英語の必修科目を落とした再履修者というと、学力が低い、やる気がない、態度が悪い等々ネガティブなイメージがつきまとうのであるが、今回英語Rを春学期と秋学期に担当してみて、そのようなイメージは全般的な外れであることがよく分かった。学力差は、プレイメントテストでクラス分けを行っている通常のクラスと比べるとあることは否定はしないが、決して英語力の低い学生の集まりではない。中には、なぜ単位を落としたのか理解に苦しむ程英語力の高い学生、まじめに毎回宿題をこなしては出席する学生などが多く、よく私は、「このクラスは日本で一番レベルの高い再履修者クラスである」と言っただけで学生たちを褒めたものである。始めの頃は、学生の英語力を知るのに手探りの状態であったが、学力の高さが分かってからは、通常の必修クラスと同じような難易度の教材を取り上げた。各学期の最後の方では、インターネットからTEDの世界的に著名な人口学者のプレゼンテーションを教材に使ったり、秋学期はヒラリー・クリントンの敗北演説やオバマの広島での演説なども教材に使ったが、難しいことをやればやったでしっかりとついてくるのである。むしろ、再履修だということでも易しいことをやると、かえって学習の動機付けや意欲が下がるように思えた。どのようなクラスであれ、大学生の知的レベルにあった難しい教材を使い、それに食らいつかせるぐらいの方がよい結果が出るのは、立教のどの英語のクラスでも同じである。

英語の必修科目の単位を落とした学生は、単位認定試験で単位を取り直すのが、カリキュラム上の本筋ではあるが、その制度の不備を補完するために英語Rが始まった。今後入学してくる学生の英語力や英語の学習スタイルはますます多様化するであろう。そのような中で、全カリ英語は何をなすうのかは真剣に考えるべき課題である。英語の履修ルートを複線化し、1路線でうまくいかなくとも、自分に合った別の路線が用意されている、これが大事なのである。

英語の単位を落とした学生諸君へ

最後に、英語の必修単位を落とした学生には、声を大にして言いたい。英語の単位を落としたことなどたいした問題ではない、さっさと単位認定試験なり、英語Rで単位を取り、英語が好きなら、必要だと思うのなら、英語副専攻なり英語自由科目なりで好きなだけ英語を取り、勉強すればよい、英語が嫌いであったり、必要だと思わない学生は、自分が打ち込める他のことを見つけ、それに真剣に取り組めばいい、英語なんかでつまずいて、何時までも道草を食っているのは貴重な学生時代の時間が勿体ないぞ、と。その一助として、英語Rが活用されるのであれば、それこそがまさに英語Rが意図したことなのであるから。

Syllabus

授業の目標

Course Objectives

英語の基礎的な文法事項や語彙を学び直し、英語運用能力の向上を目指す・

授業の内容

Course Contents

英語を使ってコミュニケーションをするのに必要な最低限の文法項目を学習し、基本的な語彙の意味や使い方を復習し、発音の基礎を学ぶ。読む、書く、聞く、話す、の4技能を用いた練習を重ね、積極的に英語が使えるようになるよう授業を進める。

授業計画

Course Schedule

1. 授業概要説明
2. 基本文法1、リーディング&リスニング
3. 基本文法2、リーディング&リスニング
4. 基本文法3、リーディング&リスニング
5. プレゼンテーション・ライティング1
6. 基本文法4、リーディング&リスニング
7. 基本文法5、リーディング&リスニング
8. 基本文法6、リーディング&リスニング
9. プレゼンテーション・ライティング2
10. 実践文法7、リーディング&リスニング
11. 実践文法8、リーディング&リスニング
12. 実践文法9、リーディング&リスニング
13. プレゼンテーション・ライティング3
14. 最終テスト、まとめ

成績評価方法・基準

Evaluation

平常点 (In-class Points)

出席と授業参加 (30%)、課題・宿題など (40%)、最終テスト (30%)